

福崎町文化

第27号 平成23年3月31日 兵庫県神崎郡福崎町福田176の1 福崎町文化センター発行



『北野神楽』

柳田國男五〇年祭を前に

東京学芸大学 石井正己



柳田國男は、昭和三十七年（一九六二）八月八日に数え八十八歳で亡くなった。今年の命日が来ると、満四十九年を迎える。半世紀と言うには早いものの、今年は五〇回忌という節目の年に当たることになる。

福崎では、昭和十六年（一九四一）八月十五日に亡くなった兄の井上通泰とともに、二人の遺徳を偲んで、毎年八月に山桃忌を行ってきた。生家での講演会、記念館での短歌祭を重ねてきたことは周知の通りである。私も十四年前、筑摩書房から『柳田國男全集』を発刊する直前の夏、「柳田國男の葉書」についてお話ししたことがある。

すでに話題に上っていると思われるが、今年の八月六日・七日の両日、

町制五十五周年記念事業として、「柳田國男五〇年祭・第三十二回山桃忌」が実施されることになった。全国に先駆けてこうした事業が実現できるのは、長年にわたって山桃忌を継続してきたからにはほかならない。町を挙げた取り組みがこうした継続の中から生まれかけてくるのはすばらしい。

六日は、山桃忌の追悼儀式の後、「柳田國男の原点・福崎」の基調講演、「今、柳田國男を考える」（仮題）の記念講演、「21世紀と柳田國男」をテーマにしたシンポジウム、そして夕食交流会が開かれる。七日は、午前中に「柳田國男ゆかりの地を歩く」のフィールドワークで辻川界隈を探索し、午後は「柳田國男と辻川」の演劇が行われる。

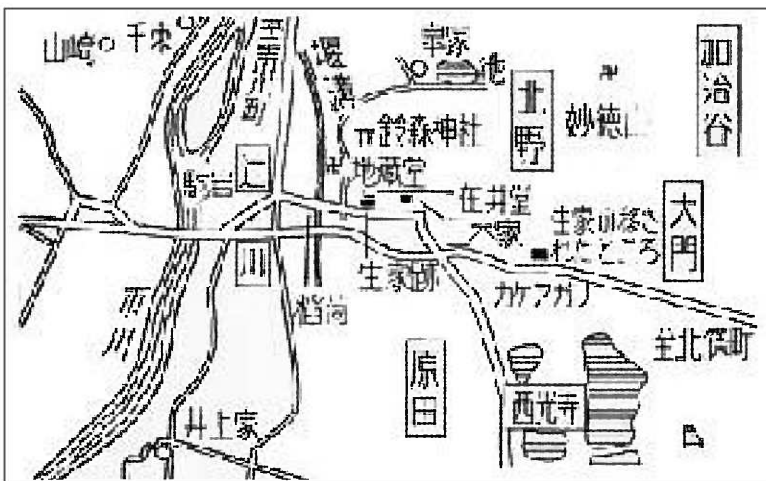
この事業を進めるにあたって、柳田ゆかりの機関や団体がずいぶん後援してくださることになったのはまことに心強い。そうした人々からは「生地にふさわしい記念事業ですね」とも、「福崎から発信するのが一番いい」という声も聞く。お盆前の暑

い時期になるが、国内はもとより海外からも、「この機会にぜひ福崎を訪ねたい」という希望が来ている。

柳田は明治八年（一八七五）七月三十一日に生まれ、北条に移転していた時期もあるが、大庄屋・三木家に預けられたため、数え十三歳で茨城県に移り住むまでほとんどを辻川で暮らしている。ずいぶん長命でもあったので、人生の出発点にすぎなかったということにもできるが、柳田の場合、心の故郷として福崎を慕いつづけたことは特筆に値する。

柳田に限らず、人はだれでも生まれ故郷を持っていて、その環境から自由になれない。かつてはそこで一生を終える人が多かったが、明治以降は社会の構造が変わり、故郷を離れて暮らす人がずいぶん増えた。都会が故郷を離れた人々によって形成されたことは、早く柳田の説くところであった。柳田自身は家庭の事情で兄のもとに引き取られ、その後、目を見張るようなエリートコースを歩んだことは繰り返すまでもない。

柳田の著作をいくつかでも読んだことのある人ならば、事あるごとに故郷・福崎の生活経験を引き合いに出すことはすぐに気がつく。これほど故郷のことを話題にしたがる人はめったにいないだろう。しかも、単におしゃべりだというだけでなく、柳田の学問の出発点が故郷にあることは間違いない。そうだとすれば、福崎は、柳田という人間を知り、そこから未来を考えるための大切な場所であることになる。



辻川周辺の地図（以下『故郷七十年』より）

柳田は日本人の歴史を構想するにあたって、常に故郷に基軸を置いていたようである。例えば、昭和三十六年（一九六一）の『海上の道』に収録された「人とズズダマ」という文章で、ズズダマと呼ぶ植物に触れる。四、五歳から、田のへりに自生するズズダマを採り、糸に通して首に掛けて遊んだという。九歳の年には、顔から手足にできた疣を取るために飲んだ？ 苡仁（ヨクイニン）という薬は、ズズダマの皮から取ったものだと聞かされる。

ズズダマは古名をツシタマと言い、沖縄・奄美諸島の歌謡集『おもしろ草紙』のツシヤと関係するもので、宝貝に代わるものとして北へ移植されたのではないかと考えてゆく。小さな植物の実から、海上の道を伝って移動した日本人の歴史を構想するのである。こうした思考を育んだ出発点、他ならぬ故郷・福崎にあったことになる。

柳田は民俗学を確立するにあたって、自分の経験をとでも大切にしたい。豊かな感受性を持った腕白な少年が周囲の自然や人間と触れ合い、やがて大人になってその意味を問い直す

のである。それは客観的なデータを集めて、論文をまとめてゆくような方法とはずいぶん違う。論文ならば普通は言わないような個人的体験を手放すことがなかったのである。



柳田國男（明治21年）

実際、柳田は晩年、自分の前半生をだれかに語りたくて仕方がなかったようである。昭和三十四年（一九五九）の『故郷七十年』は、『神戸新聞』に二〇〇回にわたって連載された談話筆記であった。そこには、幼い日の経験と周りで起こった動向が鮮明に語られている。それは柳田の目がとらえた一三〇年ほど前の福崎の姿であった。

そこで語られる話は、決して楽しい話題ばかりではなかった。長兄が嫁を貰うが、二夫婦が住むには小さい家で、嫁姑の争いが絶えなかった。その結果、兄嫁は実家に帰り、兄はやけ酒を飲むようになった。その後、兄は医者となって再生するが、これは、幼い柳田にとって忘れがたい事

件であった。今も福崎に残る生家を「日本一小さい家」と呼ぶが、それは客観的判断というより、柳田の経験と強く結びついているのである。



カケアガリに移されていた生家

会を幸せにするための学問として生まれたのであり、柳田はそうした思いを生涯手放すことはなかった。

柳田は、物事を考えるにあたって常に故郷・福崎を定点観測の場所にしてきたことがわかる。

一度でも故郷を離れたことのある人ならば、短い間にも長い間にも、どんどん変わってゆくことを実感した人は多いだろう。柳田も帰郷するたびに、幼い日の生活が消失し、町が美しく変わってゆく姿を目の当たりにしたはずである。柳田にとって故郷は、懐旧の念を催す以上に、実践的な思考を促す場所だったのである。

四

また、北条にいた明治十八年（一八八五）に経験した飢饉にも触れる。有力な商家が焚き出しをして、食糧のない人がお粥を貰いに行き、柳田自身も毎日お粥を食べさせられたという。兄の悲劇もそうだが、こうした惨事の経験が民俗学の進む動機になったのである。民俗学は家族や社

だ。死者と行方不明はそれぞれ一万人を超え、避難者は一八万人を数えるばかりでなく、福島原発で事故が起こり、放射性物質の拡散による環境汚染が心配される状況にある。復興の兆しがなかなか見えない中で、多くの人が不安を抱えながら生活している。

実は、柳田は明治に起こった三陸海岸の津波について、時々書いています。明治四十三年（一九一〇）の『遠野物語』には、遠野出身の男が田の浜に婿に入るが、大津波で妻子を失い、生き残った子供二人と小屋を掛けて一年ほど暮らした夏の夜、妻の亡霊に遭う話がある。妻はかつて心を通わせた男と夫婦になったと言うので、男は子供のことを口にするが、妻は泣くばかりであった。亡霊の現れる怪談であるが、この話には津波が引き起こした人生のドラマが集約されている。

昭和三年（一九二八）の『雪国の春』には、大正九年（一九二〇）、三陸海岸を徒歩で旅した際に、「二十五箇年後」という文章に、唐桑半島の宿という集落で聞いた体験談が載っている。この集落では四〇戸足らずのうち、一戸だけが残ったという。この話をした婦人はその時十四歳で、母親と乳呑み子もやっと生き残ったそうである。その後、臆病になって高台に上った者、食うが大事だと浜辺近くに出た者、他所から来て勝手に住む者などあったという。短い文章だが、津波から二十五年後の集落の様子を見事に書き留めている。

柳田自身のことでは、関東大震災は、国際聯盟委任統治委員としてヨーロッパにいて経験していない。むしろ、生命を脅かす危機を感じたとすれば、戦時中の空襲であろう。

昭和三十三年（一九五八）の『炭焼日記』に載った昭和二十年（一九四五）の日記には空襲の記述が頻出する。しかし、事前に敗戦を知ったときには、「いよいよ働かねばならぬ世になりぬ」と書く。柳田の学問は危機を乗り越えるためにこそ存在したのである。

今、もし柳田が生きていれば、未曾有の状況を前にして、やはり同じように言うのではないか。柳田は世の中の役に立たない学問には意味がないと考え、学問の意義を説きつづけたからである。そうした志は私たちが受け継がねばならない。八月の五〇年祭にしても、今回の災害とそれぞれ別の人生が向き合い、未来を拓く実践的な思考を促すことなしには意義がないと言ってもいい。

（三月二十九日）



福崎町文化協会の概要

吉 識 正 明



はじめに

無能無才の私は、その任にあらずという自覚を十分に持ちながらも六年に及ぶ歳月、伝統ある福崎町文化協会の会長をつとめさせていただきました。

その間骨身惜しまずご協力くださった役員の方々はじめ会員の皆様、また、ご支援いただいた町当局と教育委員会に厚くお礼を申し上げます。退任にあたり文化協会の概要についてまとめておきたいと思えます。

文化協会の設立

私たちの文化協会は昭和六十一年十一月二十二日、文化センター大ホールで設立総会を開催しその歩みが始まりました。

当時のわが国は戦後四〇年、中曽根総理の「戦後政治の総決算」を旗

印に、国鉄の分割民営化をはじめ多岐に渡る改革が進行中でありました。教育の面でも、臨時教育審議会は、高度成長期から成熟期へ、長寿社会へ変容するわが国の教育改革の原則として、「個性重視の原則」と「生涯学習社会の建設」の二点を答申しました。四半世紀余りを経過した現在も基本的にはこの方向に改革は進行していると思えます。

福崎町においても昭和五〇年代には、柳田國男生家の移築復元、松岡家顕彰記念館の完成、神崎郡歴史民俗資料館として郡役所を復元するなど歴史的文化ゾーンが急ピッチで形成され、多くの町民の間にも「文化・文化財を大切にしよう」という気運の高まりがありました。昭和五十九年の町の総合計画（サルビアプラン）にもそのニーズに答えるため、教育文化の振興を大きく取り上げ、福崎町史の編集という事業も始めました。このような背景の中で、正に時宣を得て私たちの文化協会は設立されました。

設立の原点

従ってその原点は、福岡町の風土や歴史伝統をふまえ、この町固有の文化の継承と発展を目的とすることであり、以後多くの先輩の役員会員の方々の努力により今日まで引き継がれてきました。

他の市町の文化協会の多くが、趣味特技を同じくする人たちで結ばれた所謂公民館クラブの連合体として組織されている現状がありますが、私たちの文化協会は、それらとは独立した別の性格を有する団体であり、活動の中味も自ら異にするところが多いのがその特質です。

主たる事業

文化協会の事業は通例五月の総会と講演会で始まります。

七月には柳田國男生家とその周辺のクリーン作戦に参加し、同場所において小中学生による写生大会を実施します。これは、山桃忌を前に、近代の西洋文化の嵐の中で多くの弟子を育てつつ、その生涯を日本画に賭けた画家松岡映丘（松岡家八男）の画業を称えるための事業です。

続いて八月、山桃忌奉賛の短歌祭を町の短歌会と共催します。歌人としての柳田國男、並びにその兄（松

岡家三男）の宮中御歌所寄人として御歌始の点者もつとめた歌人、井上通泰を偲ぶものです。

秋の深まる十一月には会員による研修旅行で東へ西へ、有形無形の文化、文化財を見聞しながらお互いの親睦を深めます。

年明けの一月終わりには、町内の就学前の幼児、小中学生、高校生、大学生、勿論成人、高齢者の皆さんによる華やかなふるさと文化祭の開催。（一昨年の「福岡町文化」に秋武副会長により詳述されています。）



そして三月末には、役員会による当該年度の反省と翌年度の計画でしめくります。

特別な事業としては、平成十七年度協会創立二〇周年を迎え、道上洋三氏による記念講演会を開催、数多い社会事業についてスピーチにユーマアたっぷりのお話の後、文化センター大ホール満席の参加者による「六甲おろし」大合唱で皆さんに喜ばれました。

平成十七年、十八年の写生大会では、芸術活動で全国的に定評のある香寺高校美術部の皆さんを招待し、顧問の清田先生（現川崎医療福祉大学）のご指導もいただきながら町の小中学生たちは写生と展覧会ができました。



平成十九年十月には福岡町出身で作曲家、ピアニストとして東京中心に音楽活動を続けるマツオカ利久氏（松岡利久）のコンサートをはじめて故郷のエルデホールにおいて開催し、福岡高校同期の有志と文化協会役員が実行委員として協力しました。ヴォーカリストの楠田さん、清水さんの出演もあり、松岡君がその情熱を傾けている金子みすゞの作品など多彩なステージで充実した昼夜二部のコンサートが実現しました。

対外的なものとしては、平成十八年十月、西播磨文化協会連絡協議会との共催の形で「ふれあい文化交流会」を福岡町において開催し、私たちの活動をビデオで紹介し、その後、田尻地区の浄舞を鑑賞し、古典音楽芸術の研究者大渡敏仁氏による「近畿地区に伝わる王の舞について」と題する講演会を実施し、午後には伊藤館長の説明により柳田國男生家と記念館を見学、続いて出田学芸員の案内で三木家を見学し、西播磨地域より参加者百名ばかりに福岡町に伝わる文化、文化財の一部を紹介することができました。

また、平成二十年十一月には姫路市ウエルサンピアを会場に県内各地の文化協会の代表が集合し、「地域

文化を考えるシンポジウム」が開催され各地の実践と交流、翌日には、日本玩具博物館見学の後、わが町の歴史的文化ゾーンを県下多くの人たちに紹介する機会がありました。

P・D・Sのサイクル

文化協会の主催する事業のすべては、その広報から参加者の募集、運営、閉会に至るまでの過程を二十五名の役員が分担して運営しています。事業の終了直後には役員全員による反省会をもち、細かく評価（SEE）します。そしてその結果に基づいて次回の計画（PLAN）と役割分担を事務局長が調整し、事業を展開する（DO）というパターンを重視しながら活動が続けております。

その過程で、お互いに議論し、意見の対立もありますが、協会設立の原点、目的を役員全員がしっかり持つておりますので、結論が大きくぶれることはありませんし、それがはっきりしていることで常に自信をもって活動してくれていると自負しております。

三方よし

私たち協会の役員は、多くの事業を展開しながらその中味から自然に

多くのことを学んでいます。即ち無意味的に自分自身の生涯学習をやっていることになりました。

そして何よりも事業に参加する人たち、講師として選者として指導してくださる先生方との出会いから多くの人たちと人間関係を築くことができます。

また、事業に参加してくれる就学前の幼児から小・中学生、高校生、大学生の皆さんにとっては、学校園とは異なる環境で行われる社会学習の場となり、成長過程で一定の収穫が期待されます。もちろん目的をもつて参加される成人、高齢者には意図的な生涯学習の場を提供させていただいていることになり、皆さんの人生を彩る一コマになっていると思っております。

更にはまた、最近元気な町づくりには、その町の経済力と合わせて文化力を高めることが必須の条件であるといわれるようになりました。私たち文化協会の存在はこの側面からも若干の機能をしていると思っております。

平成十九年の会員研修旅行で湖東に残る近江商人の町を訪れました。かつての、どの居宅を拝見しても「売手によく、買い手によく、世間にも

よし、三方よし」の文字が眼にとまりました。この合言葉で近代商業の基礎を築いた人たちをお手本に、「私たち自身に、参加される方々に、そして町にとつても、三方よし」の理念でいつまでも文化協会の活動が継続することを願っております。

地域の文化力

私がかつて教職にあった時、全校生が運動部又は文化部のいずれかを選択して参加する部活動において、その数が余りにも運動部の方に片寄っていた現実には、全校朝礼で次のような講話をしたことを思い出しております。

「君たちが長い人生を歩むためには周りの人たちに活かしてもらうことが必要であり、同じように他の人を活かすことも必要です。」

お互いに協力して一つの目標に向かうすばらしさを教えてくれるのが運動部や文化部の活動であり、どちらも教科の学習と同じように大切です。

しかし、スポーツと文化はその性格上若干の違いがあります。

スポーツは、どちらかというとなりに重点をおき勝つことを目的として別の集団又は個人と争う世界です。

一方文化は、自分たちの表現やメッセージが見る人、聴く人に伝わり広がって共感してもらうことこそが目的です。文化部のよさももつと理解しよう。」と。

「物から心へ」。とみんなが言う二十一世紀にはいり一〇年がたちました。しかし、年間に三万人もの自殺者があり、所在不明の老人が多く、子どもの虐待の報道も続いています。

こんな不安と日常が隣り合わせの社会の中だからこそ、争うのではなく、喜びや感動を共にし共感を広げていくための文化力を、地域社会の中で高める努力をすることが、その地域に住住する住民にとって喫緊の課題であり、文化協会の使命でもあると思っております。

町民の皆さまの文化協会への更なるご協力を賜りますよう僭越なお願いを申し上げ在任中のお礼のことばとさせていただきます。

福崎町文化協会では、会員の皆さまを募集しております。



青春の満蒙開拓青少年義勇軍

山下 清市



て一九三八年（昭和十三年）を第一次とし、以後の一九四五年の第八次まで、高等小学校の青少年（若干の年長者あり）が志願で参加した。

私の生まれたのは、宍粟市山崎町の北はずれの、四〇戸程の小さな村

でした。農地も少なく十四町歩程の面積しかない、揖保川が氾濫すれば陸の孤島になる事がある、揖保川沿いの集落でした。生家は二反の小作で貧しい暮らしでした。六年生になった時、神野小学校より、高等科を終えた三人の男子が、満蒙開拓義勇軍へ、応召兵と同じように送られて壮途についた。その頃から私は、親が働いても麦飯で、五月にもなれば南京米を食べるしかない農家、親は勉強より働けと口癖だった。先生に満州へ行けば十町歩の土地が無償で貰えると教えられ、宏漠千里の夢を考えるようになった。

この義勇軍は、北辺の守りに五族共和と満州建国を目指す、国策とし

茨城県の内原駅に下車、雪の降る夜の道を、満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所の営門をくぐり、夜のことゆえただ円錐形の杉皮葺の兵舎、日輪兵舎が並んでいた。それぞれ名前を呼ばれ、五つの兵舎に一小隊より五小隊に振り分けられ、同級生の志水君と同じ四小隊であった。我々の所属名は埼玉・兵庫の混成で河南中隊（河南貞雄氏）と言ひ、以下五小隊

の組織で、親元を離れ初めての集団生活（実は混成の埼玉の隊員は我々より二週間程早く入所していたのだ）。

一応先輩であるから聞いたり、教わることが大変だった。それは、埼玉の関東言葉に「おいてめえ何してるんだ」「ばか野郎」と言った具合で二週間の先輩にたじたじであった。指導員は、農事は松岡一治氏（この人は戦後福岡町の農業普及員を定年までされた）、庶務医療は関小平氏、訓練は橋本誠三氏であった。小隊長は内原の郷土出身の幹部候補の年長者が配属された。

誰も初対面の隊員で訓練が始まり、体操は「大和体操」ヤマトバタラキと言う天孫降臨にあやかる。掛け声も、ヒイ・フウ・ミ・ヨ・イ・ム・

ナ・ヤ・コ・トと言う。それに義勇軍綱領等全てが「神ながらの道」の

精神と教え込まれた。その半ばの四月十九日、アメリカ軍の本土空襲があり、内原の遠く東の松原をかすめ低く飛んだのを覚えている。開墾の訓練は基本の天地返しの手法である。

武道は銃剣術、次いで古武道、太い木剣の前進後退打ち下ろし等厳しかった。入所して三日すると体に虱（しらみ）が寄生し始めた。ここに

来て虱を知るが、これからの生活は虱がずつとついて回る。水戸の偕楽園にも行軍の折に見学し、いよいよ五月になると渡満の日が近くなる。五月十二日、渡満壮行会の分列行進で始まり、営門を音楽隊を先頭に内原駅より乗車、東京駅で下車。ここで埼玉県の隊員は家族と面会があり、二重橋前にて皇居遥拝、広場の小石を数個リュックに入れ、現地に埋め

るべく後にした。夜行である日、伊勢の内宮に参拝、その日のうちに神戸につき、移住協会のホテルに一泊し十五日早朝、生田神社に参拝を終え、神戸の港へラッパ鼓隊先頭に行進する。メリケン波止場にて兵庫県の隊員の家族との面会となる。

親元を離れ三ヶ月ぶりに家族と会う事ができ、学校の恩師も来られ、時間が短く感じられた。午後、乗船

の時間となり、テープを握り「海ゆかば」の合唱の中、船は岸壁を離れた。関門海峡は夜で玄海灘は波が荒く、船が大きく揺れ、船酔いする者もあり、海の濁りで黄海に入ったと聞く。大陸の玄関口大連で一泊、あくる日、旅順の日露戦役の戦跡を見学する。二百三高地の戦跡を見てこんな草原では突撃に突撃で、屍るいと重なったと言う辺り、住時を偲ばず見学であった。

目的地は北満州なれば奉天・新京・ハルピン・チチハルと通り、内蒙古との境の町、成吉思汗の一つ手前の小さな大溝駅で下車、ここから歩いて三キロの豊栄訓練所に入所する。当時はなだらかな山に木と思うものはみえず、樹木のあるのは鉄道の駅くらいであった。営門の門柱には「満州開拓青年義勇隊満鉄豊栄訓練所」左の門柱には「満鉄豊栄日本青年学校」。ここは既に先輩達が三年の現地訓練を終え、成吉思汗の近くに豊春・豊秋と言う名前が入植しており、豊栄訓練所は日本馬・牛舎・豚舎・鶏舎・綿羊と家畜がいて、農作業と鉄道警護を主に、近くを走るハルピン・満州里を走る濱州線の安全警備の為の義勇隊の訓練所であった。軍事訓練と農作業と半々である。



豊栄訓練所の朝の点呼

わり、環境の変化が原因か寝小便をする者があった。恥ずかしいから黙って布団をそのままにする。暖房のオンドルで床が温もると臭うから所詮いじめられるのを氣遣ってオンドルの近くに替ってもやまず、何時からかなくなつた事があった。長い冬の間は、毎日が軍事訓練で厳しかった。忘れられないのは冬に起きる野火である。夜中に遠くの空が明るく見えるのは、内地では山火事だがこの草原では野火、落雷とかまた草原を走る列車の落とした熱い石炭がらが原因で燃えだすのだ。近ければ四・五日で、遠くの火になれば時には三週間も燃え続け近づいてくる。

近くには冬場の家畜の乾草が点々として山に積まれており、防火線を作る草刈りに全員で夜中に出る事もあり、冬場は狼の吠える声ガラスに響き、聞き耳を立て郷愁を募らせ、また歩哨についた時など土塀の内に怖くなって立った時もあった。そして放牧の綿羊「羊」が襲われた事もあり、この三年の内嬉しかった事は、札蘭屯の町へ関東軍の部隊に内地からの慰問団がこられた時には、芸能人の可愛い女性にうっとりさせられ、日本の女の子の顔も見事もない我々は皆故郷を想い泣く者もい

た。入院したりチチハルの街に公用で行ったりした人は、息抜きができたらしい。でも元気で機会のない隊員はそんな思いもなく、訓練は厳しく屯墾病になった者もいた(夜布団の中で親・故郷恋しと涙するを屯墾病と言った)。

厳しい北満の冬は、凍結するため第一に井戸の水汲みに、正月頃になると井戸端は零れた水が凍りつき高くなって坂になり、井戸の口と同じ高さになり、釣瓶の零れる水も汲み上げる時水が回りに凍りつき、穴がだんだん狭くなり釣瓶が通らなくなるので、氷を取り除かなくては水が汲めない。それで長い槍でつき落とさなければならぬ。便所がまた大変だ。凍りついて小の方は溢れるようになり、掘り起こして捨てる。大の方は凍って同じ位置に落ち同じに積もり、どんどん積もり高くなり尻に付き刺さるほど高くなり積もる糞柱を壊し外に出すのだ。ところが便所が建物より離れているために、夜中の小用に表に出ると、寒いので歩きながら放尿し便所につくまでに終わり、飛んで帰る不届き者がいるために、朝になると雪に残る印にも誰か分からず春まで残り、集団生活の汚点であった。



現地2年目の冬

私は先遣隊の衛生隊員として往くハルピンとチハルとの中間のサルト（いまの大慶市）の入植地に、十一月三〇人の隊員と共に現地に入る。

ここは雪の大平原で見渡す限り何もない雪原であった。風がきつく土質は強度のアルカリ地帯で作物は作りにくく多くの有機質の厩肥を、施せばおいしい野菜が取れるという事であった。ここは第一次の隊員が入植し、徴兵等で人が少なくなり補充入植であった。この開拓地にも戦争の影は押し迫り、負けるとは知らずに早く兵役を終え、ここで頑張ろうと思いい軍隊に志願した。一九四五年二月徴兵検査を受け合格春めいた三月本隊も入植し、賑やかになり、種まきも始まる五月のはじめ召集令状が来る。五月十五日関先生の家で祝宴を受け、埼玉の戸谷修一朗君と防諜のために、隠密に国境の街、牡丹江液河の部隊に入隊し、再び大慶に帰る事はなかった。

春になれば草原は花盛りで、董・アヤメと草原は花は咲き乱れ、種まきも始まり農事に訓練に、三年は待ちどろしかつた。三年も残り少ない一九四四年十一月に、隊員が本隊入植地への先遣隊・軍属として部隊に、この三つに分かれることになる。

老人大身体験発表

「わが人生の泣き笑い」

神崎学園史学部 松田 八束



皆様元気を出して欲しい話をしてたいと思います。

私は福崎新に生まれて三歳までそこにいました。四歳のときに川辺村小畑（今の市川町小畑）の天満神社に移り住みました。そこに高校卒業まで居り、その後、大阪に移り住み、今から五年前にこの新町に帰ってきました。故郷は福崎と小畑の山川です。スモッグに覆われた大都会の中でいつも美しい故郷を思い出していました。

私はこうして福崎を楽しんでいるという話をいたします。

一、早朝ローラースケート

私は定年一年半前からローラースケートを始めました。きっかけは、

膝のリハビリでした。机に向かってじっとしていてもシクシクと痛んでくる膝が何事もマイナス思考にさせるので、これを克服する方法を探していました。いろいろ試みましたが、例えばジョギングは疲労が膝にたまり、それが続けれないなど問題がありました。ローラースケートがリハビリに役立つのではないかと自分で思いつき、スポーツ店へ行ってローラースケートを求めました。ところがローラースケートはすでになく、新たにインラインスケートに変わっていました。これは困った、不安定そうなスケートを買っても飾っておくだけに終わるのではないかと…。当時は、舗装された道や石畳、コンクリートで固められた町並み、それから全てには私には冷たい・硬い・痛いイメージでした。しかしリハビリをやり遂げないことには…。私は一日ほんの一分ほどスケートを履いてみるだけでいいからと、家から自転車で一〇分ぐらい乗って、長居公園

に出かけることにしました。はじめは片足にスケートを着けて、もう一方にはスニーカーを履いてスケートに体重を預ける練習をしました。公園では土日にはかなり多くの人がスケートをやっていて、中には教えるのがうまい人も時々いました。そのおかげで、思ったより僅かの日にちで両足にスケートを履くことができました。

毎日、四時ごろに起きて長居公園に行き約一時間練習することになりました。通っているうちに、それまで描いていた外の景色は一変しました。

夜空の星も美しく輝いていました。公園の隅から隅まで滑って自分の庭のように思いました。足の裏から伝わってくる振動が体の芯まで活性化させてくれるようでした。アスファルト・コンクリート・石畳・



レンガ畳それぞれの感触がわかることが新鮮でした。散歩している人々の会話も聞こえてきました。声をかけてくれる人の言葉も色々に変化してゆくのがわかってきました。また、韓国からきた青年が写真を撮らせてくれときて、大きなカメラで何枚も写してくれたこともありました。

この運動の影響は心身ともによい事がたくさんありました。膝が丈夫になり、足が元気になり、食欲も青年ぐらいに活発になり、いつも足がホカホカと温かくなって、風邪をひかない、またひき始めてもすぐに治ってしまふことなどです。

また、何事にも積極的になるというものです。このような運動を継続してゆくのに成功するには気長になること、高い目標を掲げて目標に向かって少しずつ一日千分の一度近づくと

づくという気持ちを持つてやることだと考えています。

定年になり、福崎に帰ってきても、雨の日以外は毎朝、河川敷公園のそばの道路の待避

線でスケートをやっています。

そのおかげで、道行く人々から挨拶を交わされ、また、よその土地からこられた方には道を尋ねられたりします。集団登校の小学生とも顔見知りになります。

今から四年ほど前、平成十八年十一月十二日、日曜日午前六時四十分ごろ、日課のスケートを終えて帰る支度を始めた頃、きれいな二重虹が現れました。見とれているとこれが三重虹になっていたのでした。二重虹の外の隣接する位置に三重目が色の順番を反転してかかっていたいました。私は四重虹を探しました。主軸虹の内側に色の順番を反転して見えていました。

このときほど福崎が素晴らしい土地だと実感したことはありません。普通は、人里離れた高い山で見られない現象だと聞かされていたものですから。



二、里山歩き

私は幼いころから祖父や父に連れられて里山を歩いていたことをかすかに記憶しています。祖父たちと山

の峠を越えていくと、そこには美しいお花畑がぱっと広がっていて、すべてのお花が私たちの方に向かって「よくぞいらつしやいました」と全身をふって喜びを表しているのを見たのです。私はこのお花を守ってあげられる人になりたいと思いました。これが私の原体験です。小畑の天満神社に暮らしていた頃は、神社が里山の中にありましたから、毎日が里山歩きのようなものでした。この頃は、大風が吹く秋には椎の茂った木の枝から、ばらばらと椎の実が吹き落とされます。この落ちる音が、堪らないほどうれしく心を躍らせるものでした。寒い風の中、学生服のポケットを椎の実で膨らませ山を歩き回ることがよくありました。この気持ちは山で育ったものにはしかかわるまいと思っています。

私が故郷に帰ってきた時は、時間を作って里山歩きを沢山したいと思っていました。が、今はなかなか忙しくて実現していません。それ以外にも理由があります。最近では近くの山に鹿やイノシシの数が増えて、農作物を荒らすのでシーズンには地元猟友会の人たちが駆除活動をされます。さらに、熊の出没の問題があります。

私たちが子どもの頃の里山のイメージが一変しています。もともと村人たちが山に入ることでできる生活文化を構築するが必要じゃないかと思っっています。帰ってきた頃の頃は、昔のイメージで行動しようとしませんでした。神崎山に誰でも気軽に登れるように道を作ろうと思っっています。最初数人のグループさえできれば、一番近くの山頂から鉄塔の向こうの尾根道を切り開いて奥の道が出来ます。そのためとっいていいかわかりませんが、去年の一月に檜の木で作った背負子に一〇Kgの砂袋を載せて合計十五Kgの荷を担いで、寒い時期には河川敷公園を歩いて足腰を鍛えています。こんなことをしているのは、子どもの頃里山で遊んでたくさん森の夢を描いていたからだと思っっています。

三、畑仕事

福崎に戻ってきて一番うれしかったことは、貸農園が近くにあり、牧歌的な田園風景の中に身を置ける幸せを実感した事です。ちょっと不幸なことに、マンスリー住宅が急にたくさん建って、その農園もなくなっってしまった。ところが、また近くで遊んでいる土地が私を待っ

ました。なんとという幸せ！きっと田園が幼いころ見たお花畑の花たちのように私を歓迎してくれているのだろうと錯覚しています。

四、男の料理

昨年、保健センターで開かれている男の料理教室「いろは教室」に通い始めて、今で十六回目ぐらいになります。そこでは私の年頃から八十歳を超えた方までが参加されています。なかなかいい教室です。「男子厨房に入らず」といって、台所に入っ

て料理するようでは出世できないというようなことを母はいつていましたから、自分の意識改革をするのが大変でした。しかし、同じくらいの年配の男性が料理するのを見るだけでも刺激になり励まされました。教室で習う料理には仕込みに手間暇がかかるので、これまで家では全く復習はできませんでしたが、最近どのメニューでも七回以上は挑戦しようかと思うようにまでなりました。スイートポテトケーキを作ったところがうまくいったので、両隣の住人の方たちに食べてみてくださいと持って行きました。すると、おいしいと言っていたので大喜びしまして、鶏ササ身のカレ

ークリーム煮に挑戦しました。これも食べていただき、おもしろかったとお世辞に違いないのですが言っただけ、自信を深めました。



五、3Cなしの生活・etc

自動車、クーラー、カラーテレビなしの生活をしていると大阪の人に最近知らせたら、信じられない！とびっくりされました。ま、確かに今年の夏はさすがに苦しい思いを初めて体験いたしました。大阪の人は、

そんな生活を見てみたいとおっしゃいましたので、福崎に来られるかも知れませんが。このクーラーのない生活にも条件があります。わが家は約百年前に建てられた純和風の建物です。先ずクーラーを取り付けるのが難しい。部屋には外気が入ってきます。夏にはコウモリが入ってきます。冬は戸外と変わらない寒さです。自動車なしの生活ができるのは、近くに、駅、スーパー、郵便局、役場、保健センター、病院、学校、文房具店、神社、お寺、公園、お墓など、すべてが歩いてゆける本当に恵まれた立地条件を満たしているからです。カラーテレビのない生活ができるのは、ラジオ好き、静か好き、新聞好き、活字好きなどを満たしているからだと思っいます。

以上、私の実践している元気の原因についてのお話をさせていただきました。家族には何かとあれば、常に一日千分の一の心得と言っっておりま



す。参考になることがあれば幸いです。

クラブ紹介

フラワーデザイン

フラワーデザイン教室

坪田 美貴子

私がフラワーデザインで文化センターの公民館活動に参加させていただくことになったのは、今は亡き高田朝子先生が病に倒れられて「あの事は、お願いしませぬ。」と言われて、お引き受けしてから随分年月が経ったように思います。これまで細々ながらも続ける事ができましたのは、皆様のご協力とせっかく高田先生から引き継いだ教室を閉鎖しては申し訳ないという思いからでした。

フラワーデザイン教室は毎月第二、第四土曜日午後一時より文化センター一階の和室をお借りして開いています。内容はと申しますと、フラワーデザインの中の生花のアレンジメントとアートフラワーをお教えます。アートフラワーとは、飯田深雪先生の独自の名前であり、本来私たちは使えない名前だと聞いていますが、世間一般にアートフラワーと呼んでいます。私達が使えるのは、いわゆる「染の花」です。うす絹、サテン、ビロード、その他いろいろ

の白生地を使って一枚一枚花びらや葉っぱの形を切り、染料で色をつけ、おこてでその花、その葉の特徴を形づけて組み立てていきます。何枚も何枚もの小さな花びらを集めて一輪の花になった時の喜びと感動は、筆舌に尽くし難いものがあります。でき上がった花の一輪、一輪が愛おしく、その作品を季節に先がけて家に飾った時、ちょうどおいでになったお客様が「今年、はや牡丹咲いたんですか」と聞かれた時は、まさに本物に見えた瞬間だったと今も鮮明に憶えています。

一方アレンジメントは、本当の生きたお花を使って活け込んでいきますが日本の生け花が空間を活かし、夏は足元の水が多く見えるように活け、冬は水を隠すように活けるのは違って、足元のオアシス（吸水性スポンジ）が見えないように活け込んでいきます。形もドーム（円型）、トライアングュラー（三角形）、ファン（扇型）、ホリゾンタル（円の一部）などありますが初歩から基本をマスターすれば後は、フリー（自由型）に活かしていただけます。外国から入ってきたと言うことで、横文字の名前が多く使われていますので、もっと身近なものと感じていただき

ますように花材はお花屋さんのお花ばかりではなく、私はできるだけ裏の畑にあるものや、少し歩けば行ける山や野辺の花や木を使ってアレンジしています。秋の福崎まつりの展示会には必ず秋の野辺をイメージできる作品を出品して「ほっとするわ」とか「この前でお弁当をひろげたくなったわ」とか言ってもらって喜んでいます。

現在アレンジメントを習ってくださる生徒さんに、同じ花を同じ数だけお渡ししても、できた作品は、二つとして同じものはありません。これはお一人、お一人が持つておられる個性が花を通して表現できる素晴らしいことだと思っております。これからも個性を活かし、楽しい教室を続けたいと願っています。



えっ、もう二十五年目！

女声合唱団ボーコ・ア・ポコ

山田 せい子

二十四年前の一月、郡内で初めてのPTAコーラスとして、田原小学校PTAコーラス「ボーコ・ア・ポコ」が誕生しました。その後、練習場所が田原小学校から八千種研修センターに移り、結成一〇年後からは「女声合唱団ボーコ・ア・ポコ」として、現在に至っています。団員は、名簿上は約五〇名、その内十数人が諸々の事情で休団中。四〇人弱のメンバーで活動しています。

年の始めにあたり、四半世紀があつという間に過ぎた事にあらためて驚いています。数年前から毎年一人二人と還暦を迎えるようになり、新年会で鍋を囲みながらみんなでお祝いするのが恒例となっています。年間のスケジュールは、一月末の福崎町文化協会主催の「ふるさと文化祭」に始まり、民俗辻広場まつり、かんざき合唱祭、フェスタ・カラー、八千種研修センターまつりと続きます。その他に昨年は、吉田公民館竣工お祝い会、八反田敬老会、神河町南小田小学校、市川町瀬加中学校音楽会へ呼んでいただきました。



また、「フェスタ・コラール」は、郡内の小・中・高等学校に参加を募り、私たちポーコ・ア・ポコが主催している合唱祭ですが、子どもたちが心をひとつにしてみんなでひとつのものを創りあげる喜びを体感できる場になればとの思いで、十二年前から開催しています。ゴルドンウイークの“民俗辻広場まつり”の折には、歌うだけではなく、ポーコ・ア・ポコ名物“チーズたこ焼き”を販売し、その経費にあてています。さて、一番肝心な演奏会ですが、

毎週土曜日、午後二時～四時、八千種研修センターで練習しています。常時団員募集中です。次の演奏会には、一緒に歌いましょう!!

最後になりましたが「ポーコ・ア・ポコ」というのは音楽用語で「徐々に」という意味です。私たちは「ポチポチ」と訳しています。

中国語教室入門

福崎中国語教室

駒田英子

ニイ好!

中国語教室が公民館クラブとして発足してお陰様で六年になります。今のところは未だ入門、初級レベルです。中国語は難しいとよく言われます。私たちも学習歴は長いのに遅々として進歩しませんがそれなりに楽しく学習しています。一時間がすぐ過ぎてしまいます。

講師は本校(姫路)以外に各地に教室をお持ちの中国人の先生で生徒のレベルに合った的確で心の通った指導をさせていただきます。年一回、他教室の皆さんとの交流会があり、先日も八十歳代の生徒さんに「継続は力なり」と励まされて帰って来ました。



初心者が何人か集まれば、一から学ぶ教室も設定可能です。

時々町外から中国語クラブについての問い合わせがあります。やはり教室を設けて講師を依頼し安定して学習するととなると難しいようです。福崎町は大変恵まれているといつも感謝しています。

福崎町にはたくさんさんの若い優秀な中国人研修生が、各企業に来ています。聞くところによりますと、初めて日本に研修生として来て、ある会社に出勤の朝、道を間違えてやっとなどどろついた途端ワァーツと泣き出したそうです。彼女たちも日本の

娘さんと同じなんだとちょっと安心しました。ポニーテールの髪をなびかせ自転車で走る小集団をよく見かけます。二年、三年の研修を終え、帰国する頃は、仕事の技術以外にも多くの事を学習して帰って行くと思います。

日本においてもこれまででも、これからも様々な問題と直面する事でしょう。だからと言って隣国ですし、関わらないですまされません。身近なところからお互いを知る努力をすべきではないでしょうか。言葉は交流の扉、カタコトでも通じたら嬉しいです。

また、先日のテレビによりまずと語学学習は、認知症予防にも適しているそうです。

私たちクラブ会員は、中国語を学び始めたきっかけは様々ですが、今も中国の大自然、歴史、文化や中国語の魅力にはまって何となく離れられないでいます。どうか来永くこのクラブが発展しますように。

毎週土曜日午前九時からと、午前十時十分からの二教室です。どうぞ見学にいらしてください。年一回文化センターの小ホールで中国映画(DVD)を鑑賞しています。

有機會再見!

第二十九回 町展作品募集

第二十九回福崎町美術展（公募展）の作品を募集します。皆様方のご応募を心よりお待ちしております。

***会期** 五月二十日（金）～

五月二十二日（日）

***会場** エルデホール

***部門** 日本画・洋画・書・写真・彫塑工芸

応募は一部門一人一点、未発表の作品に限る。

***作品搬入**

五月十四日（土）

午前九時～午後四時

***審査員**

日本画 雲丹亀利彦
洋画 坪田 政彦
書 大槻 芳岳
写真 土田智代子
彫塑・工芸 水田 文夫



山桃忌奉賛 第二十六回短歌祭作品募集

柳田國男先生と井上通泰先生の命日にちなみ、両先生を偲ぶ会として、毎年八月に柳田國男・松岡家顕彰会により山桃忌が行われています。

短歌祭は文化協会と福崎短歌会により、山桃忌当日行っています。

本年の短歌祭は、左記の要領で作品募集の予定です。

記

日時 八月七日（日）

場所 福崎町文化センター

主催 福崎町文化協会・福崎短歌会

作品 未発表のもの・一人二首以内

応募料 一首につき五百円

要領 原稿用紙に楷書で縦書き

宛先 福崎町文化センター内

文化協会事務局 宛

締切 六月三十日（木）

賞 通泰賞・町長賞・議長賞・教育委員会賞・顕彰会賞・文化協会賞・商工会賞・JA兵庫

西賞・神戸新聞社賞の各賞と

佳作数点

楠田 立身先生

（日本歌人クラブ近畿ブロック長）

表紙の写真

北野神楽

北野神楽は、平成二十二年の秋祭りにおいて、七〇年ぶりに復活した北野天満神社に奉納される伝統芸能です。

神楽の起源ははっきりと分かりませんが、元治二年（一八六五）に天満神社千年祭が行われ、このとき飾磨から神楽を呼び、奉納された記録が残っています。

その後、明治初めに伊勢大神楽を導入し、昭和十五年ごろまで行われていたそうです。

そして近年には、しばらく途絶えていた北野神楽を何かと再興し後世へ伝えたいという思いから北野まつり保存会が中心となり練習が行われ、再び氏宮に獅子の力強い舞が復活しました。



編集後記

たくさんの方々のご協力により、第二十七号を発刊することができました。

玉稿をお願いしました皆様方には大変お忙しい中を、快く執筆、ご協力くださいまして、本当にありがとうございます。

皆様方には、心からお礼申し上げます。